

鬼神の世話役～青年と少女の記録～

誠家

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある国の西部と東部。2つの陣営が争っていた頃。

東部にはその戦い方、性格、戦果から《鬼神》と恐れられた、最強の兵士がいた。

戦乱が終わると、狭くなる彼の肩身。集まる疲労。

粗雑な性格な彼によって、崩れていく彼の体調。

そんな彼に送られてきたのは…

可愛い世話役!?

そんな彼と彼女、そして彼の同僚が紡ぐ、1つの恋愛譚、ここに開幕!!

ラブストーリー

目次

第1話	出会い	1
第2話	少女の家庭と決意	11
第3話	第3部隊	18
第4話	膝枕	26
第5話	買い物	37
第6話	顔合わせ	47
第7話	ある日の出来事	58

第1話 出会い

建物を、重い足を上げながら進んでいく。

ここ最近の任務で、俺の肉体に疲労はかなり溜まっていた。

だが、それでも仕事は舞い込む。

「部隊長！クレイ部隊長、報告であります！」

「アア？ンだよ。」

「違法薬を取り扱っている集団のアジトを突き止めました！摘発に向かうべきかと！」

「…そうかよ。」

俺はまた歩き出す。

「如何致しますか。」

「今すぐ部隊の全員を武器庫に招集。さっさと潰すぞ。」

「ハッ！」

かけていく部下を尻目で見ながら、俺は無意識にため息。空を仰いだ。

「ふむ、奴らは西側の過激派の集団か。これで今月に入って3つ目の摘発。悩み事は多いな。」

「…」

「とりあえず、第3部隊の活躍、とても感謝している。報告お疲れ様。戻っていいぞ。」

「ハッ！」

「…失礼しやす。」

「…ああ、部隊長は残ってくれ。少し話がある。」

「…ウィツス。ミゼル、書類関係は頼んだ。」

「…分かってますよ。」

「アア？なんだその嫌そうな目エ。何のために現場から遠ざけると…」

「ちよ、分かりましたから短剣しまってください！」

部隊長と呼ばれた青年は、後ろの部下に声をかけた。部下は少しし

かめつ面を作ったものの、短剣を突きつけられた途端すぐに下がっていく。

「相変わらずだな」

「フンツ、妻子がいて戦闘から遠ざけてんのに、書類整理にまで文句言われてちややつてらんねエよ。」

「そう言っただけでやるな。お前も家庭を持ったらどうだ？多少は気持ちが変わるかもしれんぞ？」

「ハッ、冗談は社交の場でしてくれ。：俺にそんな相手いるわけねえだろ。あんたみたいな、軍の最高幹部サマとは違えんだよ。」

「そんなことは：いや、いい。本題はそれじゃないんだ。：少し座らないか。」

「おお、お言葉に甘えて。」

2人は部屋の端にあるテーブルに、向かい合う構造で座る。

「単刀直入に言うかね。君に、もう1人部下を付けたいと思ってる。構わないか？」

「アア？またかよ：これで何人目だ？」

「元々君のやり方が乱暴だから抜けていくんだが：？」

「細けえこたアいいんだよ。それで、なんでまた入れるんだ。今でも十分回ってんだろ。」

「いや、まだ十分とは言いきれない。なぜならダメージを負うこともあるのだから未だ改善の余地はある。」

「：まあ、俺頭悪いからそこら辺はミゼルの野郎に任せてるからなあ：いいぜ、歓迎してやる。続くかどうかは別として、な。」

「ああ、それでいい。：今夜の8時辺りに向かわせるから。対応はそちらに任せただぞ。」

「アア、了解した。：話はそれだけか？戻るぞ。」

「ご苦労さん。引き続き頑張ってくれ。」

「アア。」

白髪の男性の言葉に、クレイはそう言っていると、席を離れて、扉の方に向かう。しかし、数歩歩いて立ち止まると、また話しかけた。

「：にしても、そこまで気にすることかア？」

「…？何がだ。」

「東西の戦争はもう終わっただろ。1年も前によオ。休戦協定が結ばれたつてのに、随分と殺気立ってんだな。」

「…フツ…」

「アア？なんか可笑しいことでも言ったか？」

「いや、その通りだなと思っただけだよ。…休戦協定なんて結んでも、結局は疑心暗鬼なんだ。…分からんもんだな、人も。」

「ハッ、知らねえよンなもん。俺ア小難しいことは苦手なんだ。そういうのはそっちでやってくれ。」

「なア、大将サンよ。」

「じゃあな。」

部屋から出るクレイを、白髪の男性は見送り、その後おもむろに卓上の受話器を持ち上げた。

—————

「来ねエ。」

第3部隊専用の大部屋。

その少しデカイ席に座りながら、クレイはボヤク。彼はもう一度時計を確認する。

見ると、時間は8時を優に越えており、今や9時になろうとしていた。

それを確認してから、クレイのこめかみがピクピクと動き怒りを示す。8時に向かわせると言っておきながら全くもって来訪者が来ない。

その様子を見ていたミゼルはため息をつく。

「からかわれたんじゃないですか？あの人なら普通に有り得ますし、それに大概退職者の多いうちに割く人員なんてそうそういませんよ。」

「アア!?じゃあ何かア!?俺はあのジジイのクソどうでもいい茶番に付き合ったおかげでこんな時間まで待たされたとそう言いてえのか!」「そう言いたいというかそうでないかと。」

「ハア!?マジげんなよあのジジイ!次会ったらあの白髪全部引き抜

いてやる！もしくは服全部引き裂いてやる！」

「やる事が何とか一定のラインに収まっていますね。」

「つるせえ！帰って寝る！」

「はい、鍵閉めはしとくんで、お気をつけて。僕もすぐ帰ります。」

「知るか！勝手に帰れ！」

—————

「ああー、イライラするぜ……」

人通りの絶えない長い一本道。

彼の帰路である、その道を歩きながら、彼はブツブツとボヤク。やがて、少し離れたところに歩く少年が声を上げる。

「ママー、あの人……」

「しっ、やめなさい！」

クレイを、指さしている事をやめさせると、少年の母親は少年を抱えて走り去っていく。

「……つたく、聞こえてるっつーの。」

誰にも聞こえない音量で呟くと、クレイは頭を掻きむしった。

見ると、彼の周りには一定の隙間があった。

これは、たまたまこうなっている訳では無い。いつもこうなのだ。

—————

かつて、一年前まで繰り広げられていた西と東の戦乱。これにはあらゆる武勲をあげるもの達がいた。

その中でも、侵略、撃墜に関して多くの武勲をあげたのが、クレイだった。

その話題は、瞬く間に市民中に広がった。

国民はそれを称えた。

……だが、それも、長くは続かない。休戦協定が締結された後、国民はすぐに気づいた。

『彼は、いったい何人の人を殺したのか』

そう思い出すと、溢れる疑念と恐怖を抑えきれなかったのだろう。人々は次第に、彼を避けだした。

彼を称えていたもの達はその口を閉ざし、国史上最凶の《大量殺人

鬼》の話題はまったく上がらなくなった。

「ま、元から慣れてたけどな。」

元々、劣悪な環境で育ち、軍の中でも異端として扱われていたクレイにとつて、それは苦行ではなかった。

所詮、今までと同じこと。周りからチャホヤされる方が何か気持ち悪い。

それよりも…

「クツソあのジジイに一杯食わされたつてのが1番ム力つくなア…！」

歯がギシギシと鳴り、クレイは足早に帰路を急いだ。

「ア？電気点いてんじゃねえか。」

家の前に到着したクレイは、そうボヤク。

彼の家は、住宅地にある2階の一軒家。

正直ここまで大きなものにするつもりはなかったが、およそ数ヶ月前、今の軍の大將に命令されて、仕方なく購入したものだ。

実際、ものの置き場所が多いのはいいが、掃除なんかはまったくやっていない。

まあ、アパートですらやることは無いのだが。

しかし、電気が点いているというのはどういふことか。

「…ま、大方俺が消し忘れたんだろ。」

そう結論付けて、彼は鍵穴に鍵を差し込んだ。

「…開いてる。」

そこで、微かな警戒心。

彼はそのままドアを開けた。

「……」

しばらく注意を払うが、何も起きない。

どうやら待ち伏せということは無さそうだった。いつもと変わらない玄関を見ながらドアをくぐると…

「アア？」

…予想外のものが、リビングのドアから姿を現した。

ヒヨコリと顔を出し、こちらを見つめる青い瞳。薄汚い肌に、髪は長い金髪。しかし手入れはあまりされていかないのか所々跳ねていた。体はクレイと比べると棒のように細く、その体は簡素な服に包まれていた。

そして、暗い、湖のような瞳でクレイを見ながら、少女は呟く。

「…おかえりなさい、ご主人様…?」

クレイはしばらく固まっていたが、やがて顔を手で覆って、ため息つき、天を仰いでから…

「…クソジジイイイイイイイイイイ!!」

そんな怒号が、こだました。

—————

『おお、クレイじゃないか。どうした?』

「どうした?じゃねえだろジジイ!何勝手に俺の家にガキンチョ連れ込んでんだ!テメエの趣味はテメエン家で発散しろ!」

『おいおい誤解をするな。別に私は幼女は好きじゃない。どちらかという大きい方が好きだ。胸も尻も。』

「いらねえよその情報!」

『大声を出すな、電話が壊れる。』

「んな事より!マジでなんで俺ん家にガキがいるんだよ!絶対えあんなの仕業だろ!」

『決めつけは良くない。まあ、事実だが。』

「ならすぐ認めろや!」

『それに、私は言ったぞ。「お前に部下を付ける」と。』

「ハア!?それこのガキンチョのことかよ!悪いが俺もそんな趣味ねえぞ!」

『知ってる。というかお前は女にあまり興味がないだろ。』

「第一、部下って言いながらガキだし、俺ん家に呼ぶなよ!呼ぶなら部隊室に呼べよ!」

『何を言う。その子は部隊に入れんど？子供をそんなところに巻き込むわけなからう。』

「…あんた、18の俺をスカウトしなかったか？」

『18は大人だ。…その子は部下は部下でも部隊の部下ではない。』

『お前専属。身辺世話係として雇った。』

『ま、執事やメイドに近いかな。』

「アア!?ンなもんいらねえ…」

『言っただろ。お前はたまにはあるが負傷する。かつて戦場で鬼神と呼ばれたお前がたかだか素人集団に手傷を負わせられるということは、それだけ体に負荷がかかっているわけだ。それは十分な休憩が取れていないからだろう。』

「ンなことは…」

『最近はずともな飯も食ってないだろ。』

「グツ…」

言い淀むクレイに、ため息をつく。

『お前のことだ。国民に避けられているからなるべく外出しないようにしてるんだろ。おかげで外食もせず、インスタントで済ませてるんじゃないか?』

「…お見通つてか。チツ、ムカつくぜ…」

『元々、こうなったのは我々上層部がお前の功績を国民に大々的に報じたからだ。その責任は私も感じてる。』

『それがなんでこのガキに変換されんだよ。』

『その子は掃除、食事の家事全般でかなりの腕を持っている。お前のいい世話人になると思ってな。』

『ぎけんな!なんで俺が子守りまでしなきゃなんねえだ!ドアの前に置いてとくから迎えを…!』

『その子は、捨て子だ。』

「アア…!?!」

『しかもタチの悪い、倫理的概念が形成された後に…一定期間成長した後捨てられた最悪のケースだ。おそらく少女の中にトラウマもあるだろう。…そんな子を、お前はまた捨てるのか?』

「…んなの、そのクソ親のせいだろうが。俺は…」

『なら捨てろ。迎えの車を出そう。凍える少女に、怯える少女に罵声を投げつけ、外に放り出せばいい。その後彼女がどうなっても知らないよ、お前は言うんだな?』

「…ッ…」

蘇る、記憶。

彼の中に鮮明に刻まれた、忌々しい記憶。

悪夢のような日々。

それと同じことを、俺は…

『…どうする。』

問いかけに、クレイは息を落ち着けた。

「…この偏屈ジジイ。卑怯にも程があんだろ。」

『卑怯でなきや、この地位に居らんよ。』

「クソが…」

唸り、チラリと少女に視線を送り、またもため息。

「…わあーつたよ。あんたの策略に乗ってやる。何考えてるか知らんがな。」

『それは良かった。丁寧に扱ってやれよ。』

「やり方は俺なりで行くからな。」

『ああ、それじゃ。』

ガチャリ。

受話器を置き、少女を見る。

少女はそれに気づくと、ソファを降りて頭を下げた。

「なんなりとご命令を、ご主人様。」

その齒の浮きそうなセリフに、クレイはしかめっ面を作る。

「ご主人様はやめろ気持ち悪い。」

「…?なら、どう呼べばよろしいですか…?」

「俺はクレイ。名前で呼べ。」

「旦那様…?」

「頭悪いのか。クレイでいい。」

「…クレイ様。」

「様は要らん。呼び捨てにしろ」

「…クレイ…」

「いいか、普通に生活してもいいけど、俺の命令には従え。それが最低限だ。」

「…了解、しました。」

「あと、敬語も使うな。気持ち悪い。」

「…分かった。」

「よし、まずは…」

「お前風呂入ってこい。汚すぎる。」

「…お風呂?」

「…まさか入ったことないなんて言わねえよな。」

「…入ったことはある。…と思う。ただ、入り方忘れた。」

「チツ、マジかよ…どんだけクソ親だったんだ…」

「あの…」

「もういい。こっち来い。」

「え…?」

クレイは少女の手を掴んで引つ張る。そのまま入ったのは、浴室。

彼は蛇口を捻ると、温度を確認して、少女に向き直る。

「風呂つてのはここに湯を張ることだ。それはわかるな?」

「…うん。用意はしてた、から。」

「アア?用意はさせてたのに入らせてなかったのか?…マジめのクズか。」

「…えと…私…何かした…?」

「なんでもねえ。湯を張ったらここにあるお湯で体を流して、体を洗うだけだ。分かったな?」

「…どうやって、洗うの?」

「………やるしかねえか」

「あとは自分で出来んだろ。そこの鏡みて、綺麗になったらここにやるタオルで体を拭いて、服着て出てこい。」

「…分かった。」

多少体、髪の洗い方についてレクチャーして、クレイは浴室を後に

する。そして襲う疲労感。

「…逆に疲れてんじゃねえか。」

本末転倒だな、と彼はボヤク。

しばらくして、少女が姿を現す。

「…出た。」

「あそ。なら俺は寝るから。お前も寝るなら寝ろ。2階でもなんでも使え。」

「…分かった。」

それだけ告げると、彼は眠った。

今日あったことが一気に疲労感として襲いかかり、彼の目を閉じさせた。

—————

「…便所」

深夜、目を覚ます。

微かな尿意と共に覚醒した俺は、ソファから立ち上がった。しかし、背中にかかる重量。

見ると、少女が眠ったまま、俺の背中のシャツを握りしめていた。

そして、開かれた口から漏れる言葉。

「…おと…さ…ん…」

いつたい、どんな夢を見ているのか。

俺の事を、親父だとも思っているのか。

大体、自分を粗雑に扱った人間にまだ未練があるのか。それがほとんど謎だった。

「…つたく…面倒臭エ…」

そんな呻きと共に、俺は少女の手を払った。

第2話

少女の家庭と決意

「クレイ、クレイ。起きて。」

「ん…アア…？ンだよ…まだ5時じゃねえか…も少し寝させろよ…」

「そうはいかない。許可とレクチャーをくれなきゃ、朝ご飯作れない。」

「レクチャーならする必要ねえだろ…たく…」

クレイは欠伸をしながらキツチンまで移動すると、棚を開けた。

「調理器具なんかはここにあるもん使ってくれたらいい。火はここ捻りや出るから。水はその蛇口使え。あと今日はパンがあるから朝飯はいらん。飯作んのは今日の夜からいい。」

「…分かった。」

「…じゃ、俺は寝る。」

「…うん、分かった…」

「ふあ…あ…」

昼。

大きなあくびに、隣に座っていたミゼルが反応する。

「おや、寝不足ですか？」

「アア、ちいと面倒な案件が昨夜舞い込んで来てな。その対処に追われた。」

「へえ、隊長が苦戦するということは、総指揮官からの書類整理ですか？」

「どちらかというと身辺整理に近エ。ガキの子守りを任された。」

「ふむふむ。…ええ!？」

「…ツせえな。耳元で大声出すなよ。」

「す、すみません…ただ、隊長にそんな趣味があるとは…」

「ぶっ飛ばすぞ。」

「そう言いながら拳を準備しないでください。」

キリキリと握りこまれる拳に、恐怖の目をミゼルは向ける。

ハアとクレイは背もたれに背中を預けた。

「ガキの面倒なんざ見たこともやった事もねえからやり方が分かんね

え。」

「ええ、僕も子供の世話には苦勞して…」

「その話なら何回も聞いた。」

「釣れないな…：せっかくの幸せエピソードを…」

「聞いて欲しいならバリエーション増やしてこい。」

「おや、今度はどこに？」

「大将サマに呼ばれてるんでちよつと離れるぜ。任務あつたら無線で呼んでくれ。」

「了解です。」

「やあ、よく来たな。」

「昨日の電話ぶりだな、大将サン。」

「ははは。ま、座りたまえ。」

総指揮官のススメに、クレイは昨日の座った席に座る。

昨日と同じ構造で、総指揮官は両者の前にコーヒーを置いた。

クレイはガムシロ多量とミルク多量をそれぞれ入れる。

「相変わらず、甘党だな。」

「糖分取らなきゃやってらんねエよ。…で、今日は何の話だ？」

「いや、昨日のことについて少しね。…すまなかつた。正直に言うと君は頭ごなしに否定し、受け入れないと思つてな。」

「ま、今もまだムカついてはいるが、俺にも落ち度はあつたからそこはさほど気にしてはいねえよ。…ただ、なんで突然あのガキを引き取つた？んで、わざわざ俺に預けた理由はなんだよ。」

「…彼女は、軍人の娘だつた。軍人の父と主婦の母。両方から虐待を受けていた。父は母と子に暴力をふるい、母は子に暴力をふるつた。…先月亡くなつた、二番隊の副隊長を覚えてるか？」

「覚えてねえ。確かミゼルが愚痴つてたつてエことぐらいしかな。」

「ま、お前はそうだろうな。ここで言うと同僚からの苦情が絶えず、いくら処分を下しても、全く動じない。そんな奴だ。…アイツはあの子の父親だつた。どうやら妻に殺されたようだ。そして、その妻も夫を殺した後…。」

総指揮官は、首を振つた。

クレイはしかめっ面を浮かべる。

「で、自殺したと。…胸糞悪い。」

「いやまったくその通り。…おかげでその現場を見ていた少女は、精神的ストレスで感情を無くしたかのようになった、という訳だ。いやはや痛ましい。」

「俺からすりや、浅ましいもんだけどな。」

「…そんなわけで、軍としての失態と上層部は見ている。これを解消するためには、何としても、あの少女を真つ当に生きさせなければならぬ。」

「つまり、クソみたいな親と軍の尻拭いを俺がしなければならぬと。そう言うことか？」

「理解が早くて助かる。…私からも頼む。これは、重要なことなんだ。」

「悪いが、受けようにも俺には子育てなんて言う知識はない。俺が持つてんのは言葉に筆字、多少の軍事知識と、人の殺し方ぐらいのもんだ。…真つ当な生き方をさせたいなら、もつと適任な奴がいる。それでもか？」

「…ああ、それでも、私はお前に頼みたい。…出来るか？」

「…拒否権はねえんだろ？なら、やるしかねえ。…めんどくせえが、これも仕事だ。」

「…感謝する。それなら大丈夫だろう。」

「ハッ、勝手に納得してんじやねエよ、クソジジイ。…まだ、どうなるかもわかんねえんだからな。」

もう言つて、クレイは部屋を出て、後にする。

残った総指揮官はコーヒーに口を付けて、天井を仰いで、ため息をつく。そして、呟いた。

「大丈夫だよ、お前なら。」

——弱さと痛みを知ってる、お前なら、な……

時刻は午後7時頃。

クレイはペンや短剣などを片付ける。

「お、もう帰宅ですか、隊長？」

「アア、気になることがあってな。先失礼するぜ。」

「ええ、大丈夫ですよ。」

「…他の奴らは？」

「今日は仕事ないから先に帰らせましたね。基本的に僕らは無線で報告しあってるんで大丈夫でしょ。」

「そりやそうだ。」

「…ねえ、隊長。」

「ア？ンだよ。」

「女の子襲っちゃダメです…」

シユビツ ストツ！

「悪い手が滑った。壁に刺さったそのペン片付けといてくれ。」

「…ひゃい。」

人々を縫わずに、クレイは通りを進んでいく。相変わらず勝手に出る隙間はこういう時楽でいい。

「らっしやいらっしやい！揚げたてのコロッケだよ！美味しいよー！」

「…」

今日ぐらいは飯を買って帰るか考えるが、そう言えば少女に朝の内に調理器具の場所なんかは教えてあるんだったと思ひ至る。

「…あのガキ大丈夫かア？」

台所自体（一応）クレイが使う前提で設計されているため、少女には少し高いだろう。

それに、もしかしたら逃げているという選択肢もある。自分のような粗雑なものと一緒にいたいと思うものは、そうそういないだろう。

「ま、それならそれで仕方ねえがな。」

彼はいつもの歩調で通りを歩いた。

「…電気は点いてねえ。」

家の前で彼は呟く。

見ると、昨日点いていたリビングなど全ての電気は消えていた。空を見ると、夕焼けの赤色はほぼ無くなっており、黒が占領しているた

め、電気を使わない時間帯はどうに過ぎている。

つまり、結論はかなりの確率で一つに絞られるだろう。

「…ま、元の生活に戻るだけか。」

正直、決意を多少固めてきたクレイにとっては少し肩透かしというか、拍子抜けな話ではあったが。

それを少女が決めたなら、別に追い回すことでは無い。

「…パン余ってたっけなあ。」

そうボヤきながら、ドアを開ける。

開いていたということは、鍵を閉めずに出て行ったということだ。それもそうだ。彼女に合鍵は渡していない。

「ま、あのガキが逃げたなら当たり前か。」

彼はドアを開けて、くぐる。

…しかしそこで、違和感。

暗い家の中。しかしリビングにあるひとつの気配。

彼は数多の戦闘において、近くの部屋の《人の気配》を読み取れるようになつていた。

勿論勘違いの時もあるが、しかし彼はドアを閉めると、玄関の電気をつけずにそのまま腰に装備していた短剣の柄に手を添えた。

そのまま猛然とダッシュし、電気のスイッチを入れる。灯りが着いた途端、照らし出されるリビングの状況。

…そこに居たのは、金髪の少女だった。

「…ンだよ、いんじやねえか。」

少女は首をコテンと傾げる。

「駄目…だった…？」

「別に駄目でもねえし、攻めもしねえが…ただお前、何してんだ、ソファの上で。」

「…？クレイを、待ってた。」

「まあ、それなら良いけど…なら、なんで電気付けねえんだ？暗くて何も見えねえだろ。」

「…つけていいって、言われなかった。」

「ア？誰から。」

「クレイに。」

「俺に？いや別に俺から許可を貰う必要なんざ…」

そこでふと、クレイは気づく。

朝の会話を思い出して、少女に問う。

「なあ、ガキンチヨ。お前なんで家のドアの鍵閉めなかったんだ？お前1人じゃ危ねえだろ。」

「…？クレイに、言われなかった、から…？」

その瞬間、ああなるほど、と彼は腑に落ちる。朝の許可という言葉。そして彼女の奇妙な行動。

『…こいつは、人から命令されなきゃ動けないようになってんのか。…いや、そう育てられたのか。』

ひとつの仮説と共に、クレイは少女にもう一度問う。

「おいガキンチヨ。今から少し嫌なことを質問する。答えたくねえなら答えなくていい。いいな？」

「…うん。分かった。」

「お前、前の家で勝手に電気つけたら何された。」

「『お前が電気代を増やすな』って酔ったお父さんに殴られた。」

「ドアを勝手に閉めるとどうされた？」

「『娘が親を閉め出すな』って、同じように殴られた。」

「…母親にはどんな時に殴られた？」

「少しだけおねだりしたら『そんな余裕はない』って殴られた。」

「…それが、どのくらいあった？」

「…？お父さんは優しい時以外は毎週私とお母さんを殴った。お母さんは優しいから数日に1回くらい。」

「なるほどねえ…」

案の定、いや想像以上のクズだった。

特に父親。元二番隊の副隊長っていうのは鼻で笑いそうになるが、そもそも俺が真っ先に殺すレベルのクズだ。まあ、生きてればの話だが。

母親はまだ救いがある。大方夫の暴力に耐えられずに手を出してしまった口だろう。まあ、それでもクズはクズだ。同情はしてやるが

肯定はしてやらない。

「ま、いいや。そこら辺の小難しい対処はミゼル達の仕事だ。俺の案件じゃねえ。」

「…?」

「いや、こつちの話だ。お前にやまだはええことだよ。…それより、お前なんで逃げなかった?普通なら、こんな男の元去ってくもんだろ。」

「…よく分かんないけど、クレイの元を去るって選択肢はなかったよ。」

「ア?なんで。」

「だってクレイ、朝ご飯くれた。一緒に寝てくれた。色々教えてくれた。…それに、私はクレイに買われたんでしょ?なら、出ていく理由は、ひとつもない。」

彼女は、一切表情を変えず、そう言い切る。

その言葉に、クレイは少しだけ硬直していたが、やがて「ククツ」と喉から笑い声を出す。腕を組み、肩をふるわす彼は確実に笑っていた。

「…なにか、おかしなこと言った?」

「いや、なに…おかしな奴も世の中にはいるもんだなと、そう思っただけだよ。」

「…?どういうこと…?」

「知らなくていい事だ。ンなことより、飯だ飯。用意出来てんだろ?」

「うん…あつちのテーブルに…」

「じゃ、さっさと食うぞ。そんで風呂入って寝る。」

「…うん、分かった。」

「あと、俺アお前を買ったんじゃねえ。お前を《雇った》んだ。お前は奴隷でもなけりや売春婦でもねえ。ただのガキンチョってことは忘れんなよ。」

「うん…でも、未成年の雇用って犯罪だよ…」

「あー、知るか知るか。小難しいのは嫌いなんだよ。ほれ、行くぞ。」

2人の生活は、ここからようやく始まった。

第3話

第3部隊

《第3部隊》

それは、クレイの所属する、軍のひとつの部隊の名前である。そこは、軍の中でも《異端》として扱われてきた。と言うのも、国法の第12条・銃使用禁止を彼らは上からの許可なしで破ることが出来る。

それだけ上層部からの信頼も厚いのだ。

「信頼ねえ…」

「どつたの、隊長？」

クレイの呟きに、隣にいた少女が首を傾げる。クレイはため息をついた。

「いや、何でもねえ。…で、ミゼル。目標についたが、情報頼む。」

『了解です。』

クレイの声に、メンバー全員の耳の無線から声が出る。

『ひとまず、相手組織の人数は34人。根城の建物は二階建てのコンクリ作り。部屋自体は多くないですが、中の部屋7つに大部屋が2つ。』

「副長。武器の情報はありましたか？」

『ちよつと待って。…武器は旧式の猟銃とナイフ。情報だけならそれだけらしいけど…』

「まあ、他の物も持ってるでしょうねえ。」

「だな。そこは各自対応ってことでいいなア？」

「はい」

「了解です」

「了解。」

遅れた。ここで人物紹介と行こう。

まず最初にクレイに反応した少女。

黒髪を右側でとめた、青い目をした少女。

名前はユキナ・アズマ

出身は東洋。

次にミゼルへ武器の情報を求めた青年。

藍色の髪に、黒く細い縁の眼鏡男子。

名前はシン・アンドリユー

超真面目。

そして、最後。

長い赤色の髪に、少し暗い赤い目の女性。

名前はカレン・キャンベル

いわゆる大人の女性。

「さて、おめエら、武器の調整はちゃんと終わってるか？」

「もっちゃん」

「愚問ですね。」

「ええ。」

三者三様の、しかし同一な答えに、クレイはニヤリと笑う。

「じゃ、こっからは分かるな？」

それには、3人とも笑みで答える。

「掃除の時間だ。」

「おじやましまーす」

「おいユキナ、あまり大声を出しては近所迷惑だろう。」

「どこに配慮してんだテメエは。」

「真面目ねー♡」

まるで緊張感のない突入。

それと同時に、最初の横の部屋で声がする。

「おい、誰だテメエら…」

ダアンツ!!

クレイの、引き抜かれた銃口から発射される弾丸。

それは見事に男の頭を貫く。

横にいたもう1人も慌てて銃を構えるが、その時には既にカレンの弾丸が発射されていた。

「がはっ…」

「あ、ずるいよ2人共！ 抜け駆け禁止！」

「早い者勝ちよおー」

「こういうのは後出しの方が強エんだよ。」

そう言いながら、進む足はとめない。

「大丈夫だユキナ。どうせきっきの銃声でゴキブリ共は寄ってくる。」

「それもそつか。よーし！みんなで競争だね！」

「する気もねエし、するメリツトもねエだろ。」

「一応戦果は上がって金は貰えますね。」

「あら、私はお金好きよお。イケメン君にあげるお金が増えるわあ。」

「ボクも隊長とのお出かけで使うお金増えるなら大歓迎！」

「お前と出かける予定はねエよ。」

そう言いながら階段を上る4人。

その上に3人の男が立ちはだかる。

「止まれ！止まらんと撃つ…」

ダアンツ！ダアンツ！ダアンツ！

「それ言う前に撃つたら？」

脳天を撃ち抜き、笑顔で告げるユキナ。

屍をなんの動揺もなく飛び越える。

「未だにあんな脅しが効くと思ってるんですかね？」

「この組織下っ端だから俺らのこと知らねエんだろ。にしても不用心だがな。」

「ていうかこいつら殺していいの？」

「情報取るために1人2人は生かすとけ。あとは始末しろ。」

「りよーかいっ！」

「分かりました」

「分かったわあ」

4人の前に2つに分かれた通路が現れる。どうやらこの先に2つある大部屋があるらしい。

「右か左か。2択ですか…」

「多分どっちかにボスがいるんだろうねー…いた方が給料アップ？」

「まあ、戦果としては上がるんじゃない？」

「どうでもいいだろンなこたア。…俺は右に行く」

「じゃ、ボクも。わーい隊長と一緒に」

「やめろ暑苦しい。」

「なら、俺とカレンさんは左に…」

「あら、シン君にエスコートされるの？良いわねー。」

「いえ、一本道ですが…一生懸命やらせてもらいます。」

「うへえ、相変わらずクソ真面目。」

「君はもう少し真面目にしろ。ユキナ。」

「いいから行くぞオ。いいか、ボスは白髪でくせつ毛跳ねててグラサンのやつだ。そいつとその横にいるやつは殺すな。」

「了解」

彼らは、人を殺すことに、躊躇しない。

というか、躊躇するような人材はその部隊ではやっていけないのだ。

彼らがこなす任務の標的は、その全てが《葉》の売人や過激な組織などの《裏組織》。つまり、人を殺すことをなんとも思っていないヤツら。

そう、躊躇ったら、《殺られる》。

だから、躊躇うものはいられない。

この部隊には、先の戦乱で一定以上の功績をあげたものが配属される。

だが、その者達の中には、人を殺すことで錯乱した者や、人を殺しすぎて兵役を退いた者達もいる。

だからこそ、自然とこの隊は少数になり、今のこのメンバー達に落ち着いているわけだ。

ガヤガヤガヤガヤ

街中の酒場。

賑わうそこで席に座る、4人の男女。その中で、赤髪の女性がグラスを傾けた。

「ブハー!!」

「ちよ、カレンさん…飲み過ぎですって…!」

「やー!仕事の後の1杯は最高だねー!!」

「でーたよ、この酔っぱらい。」

「あんまり飲みすぎて、明日に持ち越さないでくださいよ、カレンさん」

「もー、ミゼル君も真面目ねー。良いじゃない、こんな日くらい。」

「いつもそう言ってるじゃん。」

「今日思いつきり平日だしな。」

「明日普通に仕事もありますからね。」

「んもう！釣れないわね三人とも！」

「あーあー…こんなおばさんとじゃなくて、隊長と飲みたかったな…」

「誰がオバサンよ、このガキンチョ!!」

「ムカツ！ボクはもう20歳だよ!!三十路の呑んだくれ!!」

「なんですってキィー!!」

「騒がしいなあ…」

避難した2人の片方。ミゼルはそう言って笑う。

「だいたい飲みに来た時はあんな感じですけどね、カレンさんは。」

それにもう一度笑うと、ミゼルはポケットから棒付き飴を取り出して、口に咥える。

「…副長、いつもそれ口に入れてますよね。好きなんですか？」

「んああ？いや、タバコの代わり、かな。禁煙してから、どうも口が寂しくてな。」

「結婚してから、やめたんでしたね。」

「ああ。嫁さんも妊娠してたし、いいヤメ時かなって。」

「子供、何歳でしたっけ。」

「7歳。俺が18の時にはもう妊娠してたからな。俺の誕生日の前の月に産まれたんだ。」

そう言つて夜空を見上げるミゼルの横顔は、何処か大人びたものがあった。それこそ、シンと5つしか変わらないのに。

「どした？」

「…いえ、なんでも。…そういえば、隊長は相変わらず飲みに来ませんね。」

「ま、あいつはあいつなりに氣い使ってんだよ。」

「それは…俺たちにですか？」

「それもあるし、国民にもだよ。」

ミゼルは、まるで煙を吐くように、飴を取り出して息を吐いた。

「あいつの大戦での功績は、それこそ他と比べても圧倒的だった。兵士としての役割は十二分に果たしてる。…ただ、軍はそれを利用した。」

「圧倒的な戦果を上げ…凄まじい数の人間を殺したことを国民に晒すことで、《軍》への恐怖を、《人》への恐怖に急転換させたんだ。」

「それによって、軍部は未だ讃えられているのに、《1番の功労者》は未だに日の目を見ていないわけですね。…発想がクズすぎる。」

「同感だ。…ただまあ、クレイ自体はあんまり注目されんのはいやらしいから、あいつにとつちや結果オーライなのかもな。」

「…だといいですけどね。」

11月の秋空の下。

もはや秋から冬へと変わるこの季節。

クレイはゆつくりと道を歩く。

「さつむ…」

ポツリと呟き、周りに誰もいないまま、上着にくるまって、しかし急ぎもせず歩を進める。

今や時刻は8時過ぎ。

いつもは活気づいている通りも、露店はしまっているためいつものような活気はない。ただ、酒場の前を通るとかなりの音量のどんちゃん騒ぎが聞こえる。

「…」

ああいうのは、2回だけ経験したことがある。

軍部に入りたてのころ。まだ軍の奴らが俺のことをあまり知らなかったころ。

絡みがウザかったのもあるが、そこそ楽しかったのは、今も覚えてる。

ただ、その後は、誘われる事どころか近寄られすら無くなったが…

「だァー、やめだやめだ!」

そう言つて自身に出てきたよく分からない感情を切り捨てる。

この道を選び、あの戦場に赴いたのは、誰でもない彼の決断なのだ。なら、後悔することほど惨めなことはない。

やがて、彼の住まう家に着く。

その家の電気は、点いておらず。

そしてその光景に、クレイは小さくため息をついた。

鍵のかかっていない扉をゆっくりと開けて、家の中に入る。

玄関の電気をつけて、鍵を閉める。

やがて、近くの扉から1人の少女が姿を現す。

パタパタとスリッパを鳴らして、少女は近づく。

「おかえりなさい、クレイ…」

「ああ。悪い、遅くなった。」

「ん…ご飯、出来てるよ?」

「おう。」

そう言つて、クレイは腰を下ろして靴紐を解いて靴を脱ぐ。

「ああ、そうだ。サファイ。」

「…?なに?」

「お前、また電気付けてなかったじゃねエか。それに、ドアの鍵も閉めてなかったし。」

「あ…ごめん。忘れてた…。」

「つたく、気イつけろよな。俺だっていつも助けに行けるとは限らねエんだからな。」

「ん…」

そして、サファイはゆっくりとクレイの持つ手提げカバンを持ってリビングに戻りかけるが、ピタリと足を止めて、クレイを見た。

「アア、どうした?」

「…助けてくれるの?」

「何が?」

「…私が困ってたら…クレイは、助けてくれるの?」

キョトンと。

首を傾げて、聞く彼女に。何処か羨望の眼差しにも似たそれを向けてくる彼女に。

クレイは少し黙って、軽いため息をついた。

腰を上げて彼女に近づいて、ポンと頭を軽く叩いて、言う。

「俺ら軍人つてのはな、相手がどんな野郎であろうと《善良な一般市民》を守らなきゃなんねエ。そこに血縁関係なんてもんは関係ねエし、老若男女なんてもんも勿論関係ねエ。」

そしてわしわしとサファイの頭を乱暴に撫でる。

「お前が《善良な一般市民》で居続けるなら、俺らはいつだって助けてやるよ。」

クレイの言葉に、一瞬驚いた顔をしたが、やがてサファイは少しだけ笑う。

「…うん。」

「…ようやく笑ったな。」

「…え？」

「お前と会ってから2週間。クスリともしなかつたくせによ。まあ、相変わらず目は死んでるけどな。」

「…そう？」

「まあいい。とりあえず飯頼む。腹減ってしょうがねエからよ。」
「ん。分かった。」

頭を掻きながら歩くクレイをパタパタとサファイは追いかけた。

第4話

膝枕

ガチャリ

扉をあけて、クレイはある部屋に入る。

その部屋の奥。置かれてある椅子に座るのは、白髪で、髭を蓄えた男性。

クレイは部屋に入り、最低限の敬意を示そうと、ピシリと手を横に体に沿って伸ばし、背筋もしっかりと真っ直ぐに固定。

「何かお呼びですか、御老公。」

「ああいや、今日はプライベートで呼んだだけだから、そんなお堅くする必要は無いぞ。」

「あらそうですか、と。」

2人はそう言いながらいつもの席に座る。

「…にしても、さっきのはどういう意味だ…?」

「何が?」

「その、御老公と…」

「ああ、なんか東洋の歳とったお偉いさんの呼び方らしい。本に書いてあった。」

「…いや、私はそこまで歳とつてないぞ?」

「御歳六十四のおじいちゃん年齢のくせに何言ってるんだ。そろそろ引退したらどう?そろそろ余生を考える頃じゃねエ?」

「お氣遣いありがとう。先日5人目孫が産まれたからな。その子が大きくなるまでは頑張ろうと思ってる。」

「ふーん…長エな…」

「それでも無い。歳を取れば時間は早くなるものさ。…それより、お前も読書をするようになったか。成長したじゃないか。」

「ん?いや、あれはサファイのやつが言ってたのを聞いただけだよ。本は嫌いだ。文字がクソみたい並んでるのを見ると吐き気がする。」

「…前言撤回だ。それより、お前もあの子を名前で呼ぶようになったんだな。」

「当たりめエだろ。そっちの方が呼びやすいからな。おかしなことで

もねエだろ。」

「ああ、いや何。どんな形であれ、親交が深まるのはいい事だ。…どうだ、あの子と暮らしてもう3週間目だが、感想はあるか?」

それに、クレイは苦笑した。

「感想としちやア、大変つてことかな。前のクソ親のせいで、色々おかしな点がある。」

「おかしな点?」

「玄関の鍵かけなかったり、部屋の電気一切つけなかったり、風呂の入りが方知らなかったり。大まかな人間生活はできるが、所々で抜けてるところがある。」

「なるほどね…」

「文字の書き方や言葉も独学らしいぜ。よっぽど頭良かったんだな。その分1度教えたらすぐできるから楽なもんだ、そこは。」

「そうか…まさかそこまで酷いとは思わなかったな…それで、どうだ?」

「あ?何が?」

「もう、ウンザリしたか?」

「…」

「元々、お前の負担を減らし、身体的回復を速めるための策のひとつであったが、もうこのまま続けるのは苦しいと言うならあの子は軍部で引き取るが、どうだ?」

「…」

クレイは、少し黙り、卓上に置かれた皿から焼き菓子を取り、2つ頬張る。咀嚼、嚥下してから、苦笑。

「聞き方に少し悪意ねエか?」

「そんなつもりは無い」

「ならいいけど。…まあ、俺の意見としては…」

「うむ」

「別に、今のままで問題ねエよ。」

「確かにあいつは色々欠落したスゲエめんどくせエ奴ではあるけどさ、その分いてくれることで助かってんのも確かなんだ。体調も前よ

りは良くなったし。それに…」

「ここで決めんのは、早計じゃねエか？」

クレイが笑いながらそう言うと、白髪の男性は、苦笑。

「…確かにな。…まあでも、これは抜き打ちテストみたいなものだった。お前が『もう嫌だ』と言おうものならすぐさま取りやめた。お前は我々の大事な《戦力》なのだから、丁重に扱う。」

「《コマ》の間違いじゃねエか？」

「そう言うな。これでも私はお前達《三部隊》には感謝してるんだ。」

「お世辞をどーも。…そんだけか？俺ア戻るぜ。」

そう言うって、クレイは立ち上がる。

白髪の男性もそれと同時に立ち上がると、自身のデスクの引き出しから封筒を取り出す。

「クレイ」

「んん？…っつと」

パシッ

男性の投げた封筒を危なげなく受け取る。

「次の《目標》だ。動くタイミングはこちらで指示する。それまでに全員に周知しといてくれ。」

「あいよ。じゃな。」

そう言うって、クレイは部屋を後にした。

「隊長ー暇だよー。」

「…ユキナ、そういうことを言うな。俺とミゼルさんは真面目に書類整理してるんだから。」

「そーだぞ、俺らは副長殿と優等生の恩恵に浸ってる身イなんだからな。」

「出来れば浸って欲しくないけど…」

「私達を書いて二度手間になるよりマシでしょお？」

「なんで書き直し前提なんですか。」

「なら逆に問うけどなんで俺らが書けると思う。」

「…そんなドヤ顔で言われてもな…」

「悪いと思ってるよ。ただ、誰も彼もお前らみてエに万能じゃねエ

の。」

「それに、うちに書類整理なんて仕事回ってくんの大してないし、楽でしょ。」

「…まあ、それはそうだけど。」

「ならだいいじよーぶ。問題ない問題ない。」

「つたく…しようがない奴らだ。」

「ミゼルさん、この書類終わりました。」

「ああ、ありがとう。じゃあ次は…」

「ふう…」

数十分後、一息つけたのか手を止めたミゼルがゆっくりと息を吐いた。そして、彼の上司に目を向けた。

「隊長、終わりましたよ。」

「あい…よつと。」

組んでいた足を解き、立ち上がったクレイは全員に体を向けた。

「つーわけで、次の標的についての情報だが、一応おめエらのそれぞれの机に置いてある。目エ通してくれ。」

その言葉に、メンバー全員が一枚の紙をそれぞれ持ち上げて、目を通す。

全員が視線を上げたと同時に、クレイは喋り始める。

「目エ通したな？ 次の標的は見ての通り、《カレス》の傘下の売人どもだ。」

カレス。

それは、ある闇ルート組織の名称。

薬の売買だけでなく、武器や人身売買などあらゆる外道なことに手を出すゲスな集団。

その影響力は広い地域にあり、東西両方に大きなコネクトがあると言われている。

「でも隊長、これこいつら潰したとしてもこういうのってまた出てくるでしょ？ トカゲのしっほみたいにさ。」

「だとしても詰んでおいて損はねエ。こういうのはほっとけばほっとくほど広がりやがるからな。ゴミは一つずつ拾うもんだろ。」

「あー、それもそつか。確かにねー」

「…にしても、私も慣れてきたわね。」

「え、何にですか?」

カレンの言葉に、シンが反応する。

それに彼女は微かに笑って答えた。

「隊長が標的を容赦なく人扱いしないことよ。私なんて最初は隊長の言い分に少し引いてた覚えが…。」

「ボクとシンは元々隊長と同じ施設の出だから、慣れてるけどね。」

「…小さい頃からこんな感じだったの?」

「ええ。…僕らは基本的に一緒にいたので、驚かなくなりませんでしたね。というか、隊長のこの考えに賛成してますし。」

「はえー…最近の若者は怖いわねー…」

そう言つて、何処か感心したような、呆れたような声を出す。そして視線は、ミゼルに向く。

「ミゼル君はどう?軍部では一番交流のある君も、最初は少し驚いたんじゃない?」

それに、ミゼルは少しの笑顔で返した。

「…まあ、確かに…最初はこの言い方に驚きや恐怖もあったと思いますけど…今となつては、何も思いませんね。こいつなりに色んなことがあつてこうなつてるつて知ってますし。」

「キヤー、良いわねえ。この信頼しきつてる感じ。イケメンとイケメンのコラボはお姉さん大好物よお。」

「おめエらうるせエよ。黙つて聞け。…そんな訳だけど、まだアジトに突入するつて訳じゃない。まだ相手戦力も把握出来てねエしな。そこら辺は諜報員なんかに任せるが、俺らは情報と指示が入り次第そこに向かい、《殲滅》する。長期戦になるかもしれない。今まで通り非番もとつていい。ただ、出かける時は必ず装備はしっかりして、いつでも出動出来るようにして、無線もいつもつけておくこと。深夜帯の突入の時は前もつて教えられるから寝る時は付けないでいい。これはいつも通りだ。それに、小さな任務なら入るかもしれないからそれも頭に入れとけ。…質問は?」

クレイの言葉に、反応するものは誰もおらず。

それに彼は、1度領いた。

「相手はクズだ。人の人生をどう踏みにじろうが厭わない、クズ野郎共だ。そんなヤツらが命乞いをし、自身の家族のことを口に出してきても気にするな。容赦なく撃ち殺せ。いつも言ってるが、それだけのことを奴らはやって来てるんだ。じゃねエと俺らの標的にはなんねエ。いいか、決して躊躇うな。殺られる前に殺れ。以上だ。」

「了解」

「…クレイ、最近忙しいの?」

「アア?なんで?」

任務後。

家に帰ったクレイがサファイと共に晩飯を食べていると、唐突に彼女が口を開く。

「…目のクマ。…なんだか深くなってる。」

「ん…あ…」

机に置いてあつた小さめの鏡を取って彼は自身の顔を確認すると、納得したように言葉を零す。

最近は、こうしてクレイの異変に気付くことも多くなってきた。

「…まー、最近あまり寝れてねえなあ。どーも早くに目が覚める…」

目元を触りながらクレイはそう呟いた。

なにか最近、いつも通り寝ていても、すぐに目が覚めてしまう。ただ、別に悪夢を見るといふことも、体調が悪いといふことも無い。

「…どうせすぐ治る。あまり気にしなくていい。」

クレイはそう言うと、先程と同様にスプーンを動かし始めた。

そう、彼にとってはよくある事だった。

わざわざ、気にすることでもない。

「……」

基本的に、2人の入浴順番は決まっていない。クレイの気分次第で変わる。

今日はサファイが先に入浴した。

「…クレイ、お風呂空いたよ…」

「んー…」

サファイの言葉にクレイはどこか気だるそうに浴室へと足を進める。その足は、やはりどこか覚束無い。

いくら大戦の英雄とはいええ、それはただの人間。疲労に勝てない。

「…よしっ…」

サファイはキュツと小さな拳を握った。

「ふああ…」

欠伸を噛み殺しながら、クレイは浴室からリビングへ向かう。

髪を拭きながら彼はリビングに足を踏み入れた。

「出たぞオ。風呂の湯抜いといたから…」

「…ありがとう。」

髪をタオルで拭きながら、クレイが告げると、サファイは何やら小道具をカチャカチャしながら礼を言った。

「…おめエ、何してんだア？」

「…クレイの疲れを取ろうと、思っで…」

そういうと彼女はなおもカチャカチャし続け…

「…よしっ…」

と、少しため息をついた。

「…それじゃ、クレイ。」

ポンポン

「…なんだ、その太ももを叩くジエスチャーは…」

コテン…

「…膝、枕…」

「いやいや…大丈夫だって言っただろオ？わざわざそうする理由は…」

「…こうやって、人肌に触れると、一定のストレスは解消できる…らしい。本に書いてた。」

「断る。」

2人は口々にそう言い切って、少しの静寂が訪れる。数十秒ほどその状態が続いていたが…

「チツ…わア…ったよ。」

ずっと見つめてくるサファイの静かな圧力に負けたのか、観念したよ

うにタオルをのけて、彼女の膝に寝転がる。

乾いて少し冷えた髪が当たったことで、サフィの体はピクリと震えるが、やがて恐る恐る問うた。

「…どう？」

「お前痩せすぎ。普通なら柔らかい場所なのに骨の硬さしか感じねエ…」

「…ごめんなさい。」

「まあでも…」

「…あつたけエな。」

「…なら、良かった。」

「とりあえずクツション一枚挟んどくか。」

「…うん。」

「…この小瓶なんだよ。なんかいい匂いするけど…」

「…アロマオイルっていう、安眠用の小物らしい…」

「ほーん、油か…そいや、ミゼルの嫁さんが好きだったな。」

「…クレイはさ、」

「あん？」

「…今の職場、楽しい？」

「それ今の状況関係ねエだろ。ていうか俺のこと聞いて何に…」

「…ちよつと、知ってみたいなって、思つて。」

その言葉に、クレイは少しだけ黙る。

こうして、彼女が何かをしたい、聞きたいと欲求を自身から出したのは初めてだった。

この数週間で、彼女も変わり始めているということか。

「…職種が職種なだけに、何も言えねエよ。必要があれば殺しも厭わねエし、殺られる可能性だってあるからな。」

「…」

「けどまあ、退屈はしねエから…そこはいい点だと思う。」

「…なら、私とは…？」

「ン？」

「…クレイは、私と暮らすのは、楽しい…？」

それに、その質問にクレイは、何も言わない。今まですぐ返した反応を、この時は少しだけ口ごもった。

そして…

「ギアな。…どっちでもいいだろ、ンな事。」

「…そう、だね…」

そう、答え合っただった。

「……」

パチリと、入ってくる陽射しにクレイは目を開ける。どうやら、眠ってしまったようだ。

「アア…もう朝か…」

微妙に、昨日の記憶が曖昧だった。

確か、サファイに膝枕をされて…

「その後、どうなったんだっけ…」

いつもより少し低い位置の視点に疑問を抱きながらも、彼は体を起こした…

トスツ

「アア？」

それと同時に何やら彼の頭にかかる重さ。

サラリと、彼の顔に金色の何かがかかる。

反射的に上をむくと、そこには小さな白い肌の可憐な顔。サファイだ。

そして、彼の下にある生暖かな何かは、彼女の足。

どうやら、あの膝枕のまま眠ってしまったらしい。

「…チツ、ちと無警戒過ぎたな。」

自身の意識の低さを咎めつつ、彼はそのまま彼女の四肢の間をすりぬけるように立ち上がると、パスパスと彼女の背中を叩く。

「おい、起きろ。もう朝だぞ。」

「…ん…」

彼女はそれに反応して目を開けると、パチパチと瞬きをしてから、クレイを見上げた。

「あ…おはよう、クレイ。」

「アア。…起こしや良かったのによ。そのまま眠るなんてな。」

「…起こすのも悪かったし、それに…」

「安心して寝てるクレイが、可愛かったから。」

唐突なその言葉に、クレイは少し押し黙る。そして、バツが悪そうに頭を搔くと…

「チツ、調子狂うぜ…」

そして、大きくため息をついてから…

「まあいいや。…とりあえず飯だ飯！顔洗ってくるから用意しといってくれ。」

「あ、うん…」

そのままサファイは立ち上がろうと…

カクンツ。トサツ。

何やらおかしな行動をして、そのまま床に寝転がった…というか倒れ込んだ。

「アア？どした？」

「…足、動かない。」

「ア？」

「…痺れて、動かない…」

それに、彼は気付く。

いくらクツションを一枚挟んでいたとはいえ、彼程の体重の者を、彼女の筋力や肉体で支えていたのだ。

身体的支障が出来てもおかしくない。

「…ごめん」

床に突っ伏しながら申し訳なさに謝る彼女を見て、彼はため息をつくと…

「…ま、しょうがねエよ。元はと言えば俺の体調管理のせいだし、おめエが謝る事じゃねエ。俺ア適当に食つとくから。」

そう言っつて、シリアルコーンを取り出すクレイ。しかし、サファイは未だに申し訳なさそうに俯いていた。

クレイはそれを見てもう一度ため息をつくと…

「…お前のおかげでよく寝れたよ。サンキューな。」

「…え…？」

それに。

なんて事ない感謝の言葉に。

彼女は驚いたように目を向けた。

クレイは何も無かったかのように牛乳とシリアルコーンをかきこむが。

彼は気づいていない。

一人の少女に、生涯初めてかけられた言葉に。

無意識に出たその言葉は、彼女の隙間だらけの心に、静かに染み込んだのだ。

第5話

買い物

「え、なんだって?」

第3部隊専用の部屋。

あまり広くないその部屋にクレイの気の抜けた声が響く。

その反応にミゼルがため息をついた。

「ですから、そろそろ有給取ってください。今月取ってないの隊長だけなんですよ。」

それにクレイも「あー…」と呻く。

「そっぴゃああったなア、そんな制度…取らなくてもいいんじゃないやね?」

「駄目です。最近軍部では『誰もが休めるホワイトな職場』という印象を推しているの、絶対休んでください。」

「まあ、その代わり命懸けなきやいけないけどねー。」

カレンの鋭いツツコミに、ミゼルも苦い顔をする。

「ま、まあそれはそうですけど…とりあえず、休んでください。最近忙しかったですし、体も休めて。」

「あ、じゃあボクも…」

「ユキナはこの前体調不良の休暇のときに有給使っただろ。もう残ってないぞ。」

「…うん、シンの言う通りだな。」

「ブー…副隊長とシンのケチんぼ…」

膨れっ面と共に文句を言うユキナを後目に、クレイは体重を背もたれに預けた。

「休暇か…」

「というわけで、休暇が出た。」

「…そう、なんだ。」

帰宅して、晩飯を食べた後。

クレイは明日の予定をサファイにそう伝える。

突然の報告にサファイも少し反応に困る。

「…えと…明日はどう、するの…?」

「それが困りモンなんだよ。俺ってこんな性格だから家ン中でダラダ

ラすんのは性にあわねエし、歩いてる途中に見つけたコソドロ口締めて
回るとミゼルに怒られるし：筋トレももう飽きたし：」

「…そ、そう、なんだ…。」

自身の主の言葉に若干引く。

暇つぶしに締められて連行されるコソドロに多少は同情の念を抱
きそうだ。

「…ま、明日は大人しくゴロゴロしとくかア…。」

そう言いながらクレイは大人しくゴロリと、ソファの上に寝転が
る。腕を枕にして鼻歌を歌うクレイを横目で見ながら、サファイは食器
の後片付けに入る。

…そして、大皿を持ち上げた所で、1枚の紙が彼女の足元に落ちた。

どうやらそれは、新しい調理器具のチラシのようであった。

数十年前に電気が発見されてからというもの、あらゆる分野で凄ま
じい発展を遂げている。

どうやら今回もそのようであった。

「……」

サファイはそれを少しだけ見てみるが、自身とは縁のないものだ：

「お、何だそれ?」

「…!!」

ピイツ!!

驚きに全身を震わせて背後を見ると、いつの間にかクレイが移動し
て彼女の手に持つ紙を眺めていた。

やがてその紙を持ち上げると、腰に手を当ててそれを眺める。

「こりゃア…新しい電気調理器具の発売チラシか。新聞と一緒につい
てきたか?」

「…た、多分…そう…。」

今クレイはサファイが読む用にと毎日新聞を取っていた。

「なにこれ、お前使えんの?」

「…み、見た感じだと、使える…。」

「あ、そう。…ふーん、オーブンレンジってエのか、これ。」

「…説明を讀んでみたけど、それひとつで、窯と同じ事が出来る…らし

い。」

「そりや便利なのか？」

「…この家は窯が無いから…便利、だと思う。」

サファイの言葉にクレイは「ふむ」と顎を触ってから、口元に笑みを浮かべた。

「明日の予定変更だ。少し遠出してこのオーブンレンジとやらを買いに行く。」

「え…大丈夫、なの…？」

「ンだよ、心配すんな。正直ダラダラしてても時間が無駄なだけだからよ。」

「そ、そうじゃ…なくて…」

「それに、こいつ買って料理の幅が広がりや、俺の楽しみも増えるってもんだ。多少高くても構いやしねエよ。…ま、その代わりウチのシエフに頑張って貰わなきゃだけどな？」

そう言って、ニヤニヤとした笑みでサファイを見つめるクレイ。サファイはその言葉に…

「…分かった。…頑張る。」

小さな握り拳と共に、そう答えた。

「…そう言えば、今日はどうやって遠出するの？」

目深く帽子を被ったサファイは横で準備をするクレイに問う。

ちなみにこの帽子はクレイに無理矢理被せられた。

「ン？アア…今日は俺の車で行くぞ。」

「…車なんて、あった？」

「家の横に布被ったデケエ塊あったろ。あれ。」

「…ああ、なるほど…」

そういえばあったなそんなもの、などと考えていると、クレイは準備が終わったのか、勢いよく立ち上がった。

「さて、行くかア！」

「…うん。」

ブロロロロロ…

大きめの排気音と共にエンジンがかかる。

少しのガソリンの臭いにサファイは少しだけ顔を顰めるが、クレイは気にせずにハンドルを握った。

「こいつ乗んのも久しぶりだなア。」

「…気をつけてね?」

「安心しろ、ちゃんと安全運転で行ってやるから。」

そう言うのと、クレイは緩やかな速度のまま道路へと出た。

すこし無骨なデザインの四輪車はそのまま大きな通りに出る。そこでは同じような形の鉄の箱が行き交っていた。

その中でも、クレイが運転する車は平均的な速度で…いや、むしろ少し遅いくらいの速度で走り続ける。

「…」

「ン?なんだよ、俺の顔じつと見て。なんかついてんのか?」

「…今日は随分、大人しめなんだね。」

「なんだそりゃ。」

「…いつも感情に任せて、知能低い行動も結構するから…運転も粗雑だと思ってた。」

「アツハツハツハ。殺されてエのかクソガキ。」

笑いながらクレイは言うが、まったく目が笑っていないかった。

それにサファイは億さず続ける。

「…運転は、凄く丁寧、なんだね。」

「…ま、俺も一応軍人で、市民を守んなきゃなんねエ役どころだ。いくら道が整備されてきたとはいえ、何があるかわかんねエからな。」

そこで突然、ある男が道路に飛び出す。

そして両手を広げて高らかに叫ぶ。

「フハハハハ! 和平などという欺瞞に満ちた者共よ! この私の崇高なる死を見届け、今の世界の歪さに気付くがいい!!」

哄笑しながら叫ぶ姿は、それは堂々たるものであったー!

キキツ

クレイは何ともなく車を停止させると、ドアを開けて道路に出る。

そして尚も腕を広げ続ける男の両肩を掴むと…

ドウムツ!!

思いつきり腹を膝で蹴りつけて失神させた。

その男を通行人に預けて車内に戻る。

「ああいう馬鹿もいるしな。」

「…なるほど。」

それから数十分後。

クレイは専用の駐車場所に自分の車を置いて、静かに外に出る。

それに続いてサファイも出ると、目の前の光景に圧倒された。

「…うわあ…大きい…」

家などしか建物を見たことがなかった彼女にしては、それは正しく、《本に出てくる城》であった。とても巨大な建造物に感嘆の声を上げる。

「デケエだろ？3ヶ月くらい前にできた、建物内に店を出来るだけ詰め込んだ施設だ。ミゼルの奴は《ショッピングモール》なんて言ってたっけか。…なんにしろ、服とか雑貨、生活用品もここにある。」

クレイはそう言う興味深げに見ているサファイの頭をわしわしと撫でた。

「いつまでも見てるだけじゃなくて、中入ろうぜ。買い物しに来たんだからよ。」

「…うんっ。」

心無しかテンションの高いサファイと共に、クレイは建物に入った。

「…ま、相変わらず目エ死んでるけど。」

「わあ…」

きらびやかな装飾に、並ぶ商品。そして、眩いまでの照明は、正しく《城》。

「…すごいね、クレイ。」

「アア、こいつア予想以上だ…」

クレイもそれらに何処か圧倒される。

これはかつて数度警備した王城の装飾にも引けを取っていなかった。

「…ところでクレイ…」

「ん？なんだよ。」

「…なんでサングラスと帽子つけてるの？」

サファイは質問を投げかけた。

クレイはそれにサングラスをかけ直しながら説明する。

「俺だってバレたらメンドクセエからな。俺は一応この国全土に顔と名前が出回っててな。で、俺の顔見たら全員怖がるんだわ。」

つまり、今ここににいる者たちを怖がらせないために、彼らのためにやっているわけだ。

「…クレイって、優しいんだね。」

「意外だったか？」

「…少し。」

「だろうな。」

クレイは肩をすくめると、ポンとサファイの背中を叩く。

「まア、そんな訳だから、あまり気にすんな。…行こうぜ。」

「…ん。」

「んー…」

歩き出して数分後。

クレイは違和感に気付く。

どうにも彼らを見ている、他の客の視線が怪しい。なんというか、何処か卑しいものを見るような目で見つめられる。

彼は一瞬、自分の正体がバレたのかとも思ったが、そうでは無いらしい。いつも向けられる畏怖のそれとは違うものだ。

…そしてその正体は、つぎの瞬間に分かった。

ある男がサファイにぶつかり、彼女はすぐに「あ…ごめんなさい。」と謝るが、あろうことか男は、

「チッ」

舌打ちをして、当たったところをパツパツと払ってからそそくさどこかへ消えた。

「…なアるほど…」

クレイは納得したように顎をさすると、サファイを見る。

今の彼女はクレイの元に来てから風呂には入るようになったし、櫛も髪に入れてやっている。

だが、服を見れば彼らの目の真意がわかる。

クレイは今の今まで彼女が自前で持ってきた服しか着せていなかった。その服は、かつての毒親の買い与えたものであり、ところどころ解れたり、薄汚れている。

…今この建物にいるもの達は過半数が和平というぬるま湯に浸かり、肥えたもの達だ。

彼らからすればこのような少女など、惨めなだけだろう。

サファイの方を見れば、特に気に停めた様子はない。恐らく、慣れているのだろう。

今まで彼女の近くに居たもの達は、そうやって彼女を見捨てて来たのだろうから。

「…」

クレイは何も言わずに、サファイの手を掴む。

「…クレイ…？」

少女の声も聞こえるが、彼は止まらずにすぐ近くにあつた洋服屋に入店する。

「いらっしやいませー！本日は何を求めですか？」

元気のいい女性のかけ声の後に彼女は少し困ったような笑顔に変わるが、恐らくクレイの格好を見てのことだろう。彼は何も気にせずにサファイの頭をポンと叩く。

「こいつに合う服を10着ほど見繕つてくれ。」

「え…と…ウチはかなり質もいい服で、それなりに値も張るんですが…」

「構わねエ。金のことは気にせず、私用で使えるものを見繕つてくれりゃいい。」

「う、承りました。」

店員はそう言うのと、サファイを試着室へと連行していく。サファイの目に、「私気にしてないよ」と言わんばかりの意志を感じたが、そんなこととは関係ない。

なぜなら俺が気にするからだ。自身はともかく、同行人が奇異の目で見られて、いい気分の者はいないだろう。

…まあ、今思いつきり自身のことを柵に上げているが。
小一時間後…

「ありがとうございます！またのお越しを！」

そんな機嫌の良さそうな、ホクホクとした顔で店員は頭を下げた。
クレイは4つの袋を両手に持ち、サファイに問う。

「どうだった？」

「…すごく疲れた…数十のバリエーションを試された…」

ただでさえ白い肌がさらに白くなっていた。

クレイは笑う。

「ま、こうして新しい服も手に入ったし良かったろ。」

「う、うん…その…ありが…」

「礼は要らんぞ。」

サファイの言葉をクレイは遮った。

「俺は雇用主として当然のことをしたまでだ。…お前が気負う事じゃねエ。」

そう言うクレイ。

その《気負う》という言葉に、ほんの少しだけ引っかかりを覚えたが、サファイは言い直す。

「…うん。…それでも、ありがとう。嬉しかった。」

「…そうかよ。」

帰り道。

建物を出て、クレイとサファイは駐車場所目指して歩を進める。

その道をオレンジ色の夕暮れが染め上げる。

「オーブンも買えたし、いい買い物もできたし良かった良かった。ま、予想以上に金使っちゃったがな。」

「…ごめんなさ…」

「だからそういうのはいらねエって。いい買い物できたっつたらろ？」

「…ん。」

クレイの言葉に、サファイはコクリと頷く。

そしてそこで、彼女の目にある光景が止まる。それは、3人の親子

が仲睦まじそうに手を繋いで歩く姿。

かつての彼女にはなかったその光景は、どこか眩しく感じる。

「…親子、か。」

クレイの言葉に無意識に反応した。

クレイも同じものを見ていたのか、どこか目を細めながらそれを見つめる。

そしてそれを見て、ポツリと。無意識にその言葉は出た。

「…クレイは、ああいうこと、した事あるの？」

言ってから、しまったと思う。この質問は、あまりに踏み込みすぎた。

…だが、クレイは何の気なしに答える。

「いいや。俺は物心ついた頃には親いなかったし、入ってた施設にやクズしかいなかったからな。あんなことする余地もなかった。」

そう、淡々と。

彼は彼女の知らない彼自身を話す。

そこで彼女は知る。

自身を受け入れてくれた彼のことを、全く知らないことに。

彼に関するあらゆることを初めて、知りたいと思った。

…いや、知りたいと思ったこと自体が、彼女にとっては初めてだった。

「…クレイはさ。」

だから、これは余計だ。

彼女の感情が、抑えきれない欲望が。

その質問を、口にした。

「家族が、欲しいと思う？」

チラリと、彼は彼女の顔を見る。

自身がその時どんな顔をしていたかは、彼女には分からない。だが、クレイはフツと笑みを浮かべると。

「…ま、相手がいいや、親にはなれるかもな。」

「…そっか。」

そのまま彼は歩き続ける。

彼女はその姿を後ろで追いながら。両手の塞がった彼の、揺れる裾を。

自身の空いた左手で掴む

：直前に、スつと。

彼女は左腕を引いた。

夕暮れに染まる空の中、カラスの鳴き声と喧騒だけが響き続けた――。

第6話

顔合わせ

「隊長、シヨッピングモールはどうでした？」

「ア？」

ミゼルがクレイにコーヒークップを私ながら問うた。クレイはそれに、コーヒークップに口をつけながら答えた。

「いや、どうかと聞かれてもなア…」

「行ってきたんでしょ？なら、少しぐらい感想あるでしょう。僕一応あそこの建設に多少関わってるんで気になります。」

「ア…」

クレイは頭を掻きながら背もたれに体重を預ける。

「…まあ、面白かったよ。あんだけ広い場所にあんだけの店が並んでるのは商店街しか見た事ねエから、屋根があつたのに違和感覚えたな。」

「ふむふむ…真面目な感想ありがとうございます。」

「あと、あれちと照明強すぎねエか？」

「それは隊長が知覚過敏だからでしょう。普通の方からすればあれが普通ですよ。」

「ふーん…そういうもんかね。」

「そういうもんです。」

「で、隊長。」

「…ンだよ。」

ずいっとユキナはクレイに近寄る。

その可憐な顔を前にしても、クレイは照れることなどなく、むしろ少し顔を顰めた。

「誰と行ったの？」

「…」

ニコニコと笑い、問うて来る彼女に…

クレイは顔を押し返すことで答えた。

「近い。」

「あうー…」

ユキナはそれによつて乗り出していた体が後ろに行つて机から転げ落ちた。

「誰とつてそりゃ、一緒に住んでるガキとに決まってるんだろ。」

「えー！隊長例の子とデートしたのー!?」

「デートじゃねエ。買い物だ。」

「それを巷ではデートって言ふんだよー！」

「いやだからデートじゃ…」

「デート」。日時や場所を定めて男女が会うこと。…確かにデートに当てはまらないこともないですね。」

「いや、会うつて言うか家で一緒にいるんだが？」

「男女がお買い物してる時点でデートだよー！ね、副隊長も奥さんとデートするもんね!?!」

「え?…あー、確かに最近はあまり出来てないけど…車で出掛けて嫁の服買ってやつたり、日用品買ったりなんかはするな。」

「ほらー！やつぱデートなんだつてー!」

「そうかア?」

ユキナが叫ぶと、クレイは疑い深い顔で唸る。そこでカレンが「なら」と口を挟んだ。

「隊長はその子と何したの?」

「何つて…あいつの服買ってやつて、そのまま必要なもん買ったただけだが…」

「デートじゃん!」

ユキナは叫ぶ。

「それもお完つ全に、デートじゃん!」

「だから耳元で叫ぶな!」

興奮したユキナの物言いに、クレイは耳を抑えて叫んだ。

「いいなー！ボクも隊長に服買って貰いたいー!」

「知るか！自分で買えンなもん!」

「わーん！隊長に彼女が出来ちやつたー!」

「だからそんなんじゃないやねエ…つて、離れる暑苦しい…!」

抱きつき、泣すがるユキナを修也は顔を押し引き剥がそうとする

が、彼女は断固として彼を離さない。

もはやカオスと化してきた話しに終止符を打ったのは…

カレンの一言だった。

「それなら、皆で隊長の家に確かめに行けばいいじゃない？」

「はア…」

もう冬場で、太陽などなく、街灯が点灯している街道。

そこをクレイは肩を落としながら歩いていく。もちろん、肩を落と
している元凶は、横にいた。

「隊長の家かー！行くの何ヶ月ぶりかなー！まあ、あの時はアパート
だったけどー！」

「それに凄まじく汚かったしな。」

「…ユキナもうちよい静かにしろ。近所迷惑だろ。」

クレイはため息をつくとき、二人を見る。

「まさかお前ら本当に来るとは…なんの意味があんだよこれ。」

「意味は無いよ…けど、意義はある！」

「なんだそりゃ。」

「へえ、ユキナにしては難しい言葉知ってるじゃないか。勉強したの
か？」

「ううん、ファッション紙に書いてあった。」

そんな会話の後、クレイは「ったく」ともう一度呻くと頭を抱えた。

「そう言えば食料は副隊長が持ってきてくれるんだっけ？」

「ああ、食料と酒はカレンさんとミゼルさんが持ってきてくれるそう
だ。俺たちは『しっかりと見定めておけ』との事だ。」

「何を？」

クレイはもう一度唸ると、気付いたように2人を見る。

「…そーいや、お前ら俺と少し離れて歩けよ？」

「え？なんで？喋りにくいじゃん。」

「なんですか？…近所に《ぼっちアピール》でもしたいんですか？」

「ぶっ飛ばすぞシン。…じゃなくてな。」

「お前ら、俺と一緒に歩いてていいのか？」

「なんで？」

「すげえ避けられてるけど。」

「え？別にいいよ？」

「…」（コクリ）

「ボクたち、10年来の付き合いの幼なじみじゃない？わざわざそんなしげみ意味無いでしょ？」

「僕達は生まれる時は違えど、最後まで共に生き、共に死ぬ一蓮托生。そんな外野からの評価なんて気にしてませんよ。」

「…シン、今度はなんの本の影響だ？」

「あ、バレましたか？東洋の《三國志》という本の中に似たようなセリフがあつてかつこよかつたんです。」

「似合つてない。」

「うるさいぞ、お転婆娘。」

「む、レディになんてこと…！」

「へー、そのレディはいつたいたいどこに？」

「ムキー！」

そんなやり取りのあと、取っ組み合いを始めた二人を後目に見ながら、クレイは少しだけ笑った。

最近、この騒がしさも心地いい。

「おーい、置いてくぞ。」

「あ、待ってよ隊長ー。」

クレイは自身の家につくと、そのまま鍵をさして回す。

「あ、閉めさせてるんだね。」

「そりゃ、最近物騒だからな。」

「今に始まったことじゃないけどねー」

「まあ、な。」

クレイはドアを押し開ける。

広めの玄関には明るい光が照らし出されていた。

「んー…？」

だが、いつも出迎える少女の姿はない。

何か取り込み中なのかと思ったが…
プルプルプルプル…

「…」

暗い廊下の向こう。

壁の影に隠れて震えている少女の姿。

「…サファイ…お前何してんだ？」

クレイが唸るように呟いた…その時。

彼の横を駆け抜けて、ユキナがサファイの元に辿り着いた。

「おー、君が今隊長と暮らしてる女の子!?ボクユキナって言うんだよろしくうー!」

「ヒツ…!」

ヒョイッ

「お、おおー?」

「お前あんまがつつくんじゃねエよ。サファイが困ってんだろ。」

「えっへへー、つい…」

「悪いな、怖がらせて。…けどお前、モール行った時は大丈夫だっただろ?」

「あ、あの時は…クレイが近くにいたから…」

「…何か違うか?それ。」

「…ツ…ツ…」

コクコクと、少女は必死に頷いた。

「…とところで、これはいったい…」

「あー、なんかまア、コイツら俺の同僚なんだけどよ、いつの間にか俺の家に來ることになってな…」

「…そう、なんだ。」

「この後あと2人來るから、そいつらも出迎えねエとな。…そのふたりが食材持ってくるから、それでなんか作ってやってくれ。」

「ん…分かった…」

「…」

「…?どうしたの…?」

「悪いな…」

「え…?」

「お前が初対面の大人と接するの苦手なの分かってんのに、こんなことになっちまって。」

「…確かに、最初は動揺、しちゃったけど…でも、クレイの仲間の人、つてことは…信用、出来るから…」

「大丈夫、だよ…?」

「…そうか。ならよかったよ。」

「お邪魔します。」

「わー、ここが隊長の家ね！イケメンの香りがするわー！」

「今すぐ帰るか?」

「やん怖い♡冗談よ?」

遅れて到着したミゼルとカレンをクレイが出迎えた。

そして、カレンの視線は彼の横に立てる、頭2つ分ほど違う少女に行く。

「…いい、いらつしやい、ませ…」

少しだけ緊張した様子でサファイが挨拶をすると…

ガバツ！

「…?!?」

突如、カレンがサファイに抱きつき、そのまま抱き締めた。

ギューツと一通り抱き締めた後…

「やだー！何この子可愛いー！それにこのサイズ感がいいわあ…！抱き締めやすくしてしかもいい匂い…」

スパアン!!

「痛い!?!」

暴走したように捲し立てるカレンの頭をクレイが丸めた新聞紙でシバいた。

カレンは頭を抑えて悶絶する。

「…んでこうウチの女共はボディランゲージが激しいのかねエ?」

「…まあ、しょうがないっちゃしょうがないけどな。」

「ま、隊に入った時からこんな感じだしな。」

クレイは新聞紙を元に戻すと玄関に置いた。

そして、ミゼルはサファイの視線に合うようにしやがみこんで、彼女に微笑む。

「こんばんは、はじめまして。俺はミゼル・スミス。クレイとはそこそこ長い付き合いなんだ。よろしくね。」

「…あなたが、ミゼルさん…?」

「お、知ってくれてた? 嬉しいなあ」

「うん…クレイが「ネチネチうるさい」って…」

「あははははは。クレイ、ちよつとこつち来てくれる?」

「事実だろ。」

「だとしても10歳の女の子に何愚痴ってんだよ!? ていうかそれもこれもお前が粗雑だから…」

「ハアン!? 人のせいにすんなよ! そもそもお前はいつもだろうが!」

「おおおお、それは喧嘩売ってるんだな? いいよ、買ってやる。」

「上等だ、塵に変えてやらア…」

「…う…えと…あの…」

「…」

「…」

オロオロとして困っているサファイの姿。

それを確認するや否や、2人は動きを止めた。クレイはそのまま未だ悶絶しているカレンの横にあった袋を持ち上げてリビングに戻る。

「クレイ、上がっていいだろ?」

「当たり前エだろ。早く袋もってこい。」

「え…えと…?」

「わー、何これ美味しい!」

「本当ですね。美味しいです。」

「む、むむむ…」

「うん、ウチの家内の味とは少し違うけど…美味しいな…」

「さらつと自分の家庭自慢入れてくんな。」

4人がサファイの作った食事を口にしながら口を揃えてそう言う。
クレイの隣に座るサファイは、少しだけ頬を染めた。

「ユキナ：お前なんでオムレツと睨めっこしてんだよ…」

「…これを食べたら、負けな気がする。」

「残したら潰すぞ?」

「隊長辛辣ウ!!」

ユキナは嘆くと、やがて机に突っ伏して唸り出す。

…やがて、躊躇いがちにフォークを運んだ。

そして、またも突っ伏す。

「ぐう…美味しい…」

「なんだコイツ。」

クレイが呆れたように言うのと、シンとミゼルが苦笑しつづため息をついた。

「…ねえ、隊長…」

「ア?ンだよ。」

「アーンして。」

「はあ?」

唐突なユキナからの要求にクレイは「何言ってるんだコイツ」と言わんばかりの視線と共に聞き直した。

「なんだよいきなり。」

「お願い!ここでしてくれないとボクは完全に負けることになる!」

「だから何にだよ。」

「してくれないとこれから1ヶ月無断欠勤するから!大丈夫、仲間なら普通のこと!」

「お前マジで何言ってるの?」

涙目になりながら訴えるユキナに対して、冷ややかに答えるものの、クレイはやがてため息をついて、ユキナのフォークで料理を持ち上げた。

「…ほれ、これでいいだろ。」

「わーい♡いただきまーす♡」

パクッ

ユキナは美味そうに頬を動かして、そして大きく息をついた。

「…はあ、幸せ。」

「そうか、良かったな。」

クレイは皿とフォークを戻すと、自身の前に置いていた酒の注がれたグラスを傾ける。

それを見ていたサファイは…

「……………」

むー、と。

なんだかむくれていた。

サファイ自身、中に生まれたモヤモヤとした気持ちに疑問を抱きながら、クイツとクレイのシャツを引っ張る。

「ん？どうした？」

琥珀色の液体を注いでいたクレイはサファイに視線を向ける。彼女は目を背けながら…

「……………」

「ア？なんだって？」

「…私も、して欲しい…」

「何を？」

「…さっきの…」

「どれよ。」

「…アーンって、やつ…」

「はい？」

「ブツ!!」

「ユキナ汚い。」

やり取りの後、ユキナがプルプルと震えながら食べていたものを吹き出した。

そして、口元を拭きながら、彼女は喋り出す。

「…あのね、お嬢ちゃん？さっきのはお子様にはまだ早いんだよね？大人なボクと隊長だから出来るんだよ？」

「…それは、関係ない。その気になれば、赤ちゃんでも出来る。」

「いやいやいや、それとこれとは意味合いが違うから。だいたい、住み

込みメイドにそんな…」

「クレイは、私はメイドじゃないって、言ってた。ちゃんとして、私を雇ったって。それに、要望があれば言ってくれて。だからこれは、その、一環…」

「いやいやいやいやいや。ただの世話役が雇い主にそんな…」

「これは、福利厚生でもある。」

「うぐっ…」

痛いところをつかれたのか、ユキナは仰け反り、黙り込んだ。

「…というわけで、お願い。」

「…いや、まア…いいけどさ。」

そして、クレイはサファイのフォークを…

「あれ？お前フォークは？」

クレイの質問に、サファイは左手を背中後ろに回した。

「さつき、落としちゃったから…洗わなきゃいけない。」

「おう。」

「…というわけで、クレイの、フォークで。」

「はい？」

いきなりの追加要求に、クレイは更に困惑した。やがて、クイツクイツとサファイは彼のシャツを引く。

「…早く。」

「…いや…」

クイツクイツ

「……………」

「…ア、分かったって。しょうがねエなア…」

クレイはそう言うと、自身のフォークで料理を掬って、サファイの顔の前に持っていった。

「あ…ん…」

彼女はそれを小さな口で頬張ると、咀嚼するように口を動かす。

そして、嚙下すると、満足そうにため息をついた。

「…美味しい。…ありがとう。」

「どういたしまして。」

サファイの礼に、クレイは少し笑いながら答えた。

その様子に前に座る3人は苦笑と微笑の間のような笑顔を浮かべ

…

「あ、アーンに続いて関節キスまで…負けた…」

ユキナは、そう言つて倒れ込んだ。

クレイは再度グラスに酒を注ぐと煽り、サファイは…

頬を染めて、小さく笑みを浮かべた。

第7話

ある日の出来事

「ふぁ…あ…」

薄暗い部屋の中。

窓から柔らかな日差しが差し込む。

そんな中、ソファで眠りについていたクレイは目を覚まして、ゆっくりと伸びをした。

欠伸をしながら、体を弛緩させる。

「…顔洗うかア…」

そう言ってソファから立ち上がる。

グイッ

「……」

突如感じた重みに彼は動きを止めてため息をついた。そして背後を見る。

そこに居たのは金髪の少女。

先日モールで買った薄いピンクの寝間着に身を包んで安らかな寝顔を浮かべていた。

袖から伸びた白い小さな手は彼の体をガツチリとホールドしていた。

「……」

クレイは微かにため息をつく、そのままホールドする手を外す。

そして空いた腕の中に、近くに置いていた新品のクマの人形を置いた。

すると気持ちよさそうに少女は抱き締めた。

クレイはそれを見ながら少しだけ笑うと、リビングを出た。

「ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…」

寒空の下。

土が硬化した地面を蹴りながら、クレイは荒い呼吸を繰り返す。

照る太陽の日差しを浴びながら一定の速度で市街地を進む。

クレイは、仕事で遅くなった翌日や朝早くから仕事がある時以外は

基本的に朝の運動を行う。体作りという名目でもあるが、それ以上に早起きするのも好きなのだ。

「あ、隊長！」

「ア?…オオ、ユキナじゃねエか。お前も朝の運動か？」

「うん、そんなところ。ココ最近忙しくて出来てなかったけどね。」

「だな。…にしても、その指の絆創膏なんだよ。猫にでも引つかかれたか?」

「うん?あー、これ?ボクね、最近料理始めたんだよね。」

「は?なんでまた。」

「…この前さ、隊長の家行ったじゃん?」

「うん。」

「その時にさ、気付いたんだよね。好きな人を捕まえるなら、まずは胃袋からだなって。」

「へえ、頑張れよ。誰に食わすか知らんけど。」

「…隊長ってさ。」

「ん?」

「相変わらず鈍いよね。」

「なんかよく言われる。」

「あ、隊長。」

「おう、シン。お前もはえエな。」

「近所の清掃は僕の日課なんで。」

「相変わらずだな。」

クレイは笑うと、少しだけ速度を弛めながら彼の横を通り過ぎていく。

「じゃ、また部隊室でな。」

「今日は遅れないでくださいよ。」

「わアーってるって。じゃな。」

「はい。また手合わせお願いしますね。」

「あア、空いてりゃ相手してやるよ。」

「お、クレイじゃん！」

「よお、メリイ。ガキンチヨはまだ寝てる時間だぞ？」

「ふうん！私はもう立派なレディなんだからね！」

「そう思っただけじゃなかったら、もうちよい成長してから言え。」

「な…ッ！」

バツ！

「どこ見てんのよ！」

「内面的に決まってるだろませてんじやねえガキンチヨ。」

体を隠す少女を見て冷めた目で返すクレイの元に、近づく人物が1人。

「やあ、クレイ。今日も朝の運動か？」

「よオ、ミゼル。お前こそはえエな。」

「まあな、早起きしてればそれなりの得もあるし。」

「ヘエ、そいつは考えたこと無かったな。…それより、お前んとこのガキンチヨ自意識過剰が過ぎるぞ。相変わらず。」

「何よー！私学校で皆に大人気なんだからね！」

「ガキ共の趣味は幼稚いからなア。ま、モテモテなのはいいんじやねエ？」

「ふん！将来クレイが告白してきても相手してあげないからね！」

「あはははははは。」

「何よー！」

「やめてやれクレイ。メリイもあまり大声出すなよ。近所迷惑。」

「…はあい。」

「いや悪い、楽しくてな。…それじゃ、俺はもう行くわ。じゃな。」

「ああ、また部隊室でな。」

「クレイ！また遊びに来なさいよね！アンタが来ると弟が喜ぶからー！」

「考えとくよー。」

クレイは腰に吊った円筒型の水筒を取り、蓋をのけて中身を煽る。

温かい中身のため息をつくど、ベンチに腰掛けた。

…その後、ゆつくりと背もたれに体重を預ける。少しずつ人の通り

も多くなってきた街中を見ながら、白い空を見つめる。

やがて、彼の隣に座る者が1人。

その人物は軽装の腰をベンチに預ける。整える前の白髪は新鮮だった。

「…大将か。…何の用だ？」

クレイはそう言うと、老人が笑みを浮かべる。

「私も、なんの気兼ねもなくお前と話したいことはあるさ。…それに、今はいつもの呼び方でいいぞ。」

「それなら、お言葉に甘えて。…今日は随分と知り合いに会うな。」

「ほお、3部隊の連中か？」

「まあ、カレンの奴には会ってねえけどな。」

「そうなのか？」

「あいつが早起きしてたら雪が降るよ。」

「そういえばもうそんな時期か。…どうだ、あの子との生活は。」

「この前も聞かれたな。そこまで気にすることかア？」

「言つたろう？お前の扱いは尚更気を使うと。…お前は、国家にとって大事な戦力なんだからな。」

「…俺も言つたろ？不満無くやってるよ。最近はちゃんと望みも言えるようになってきたし、本っ当に微妙にだけど、表情も増えた。…ま、目は死んでるけどな。」

「…それなら良い。これからもよくしてやってくれ。」

「そのつもりだよ。…じゃ、俺ア行くぜ。」

「…ああ。また軍部でな。」

「ふう…」

走り込みの後、軽めのトレーニングを行ってからクレイは帰路に着く。

自宅の近くを歩きながらクレイは水筒の中身を煽る。

蓋を閉めて振り回しながら、鼻歌を歌って歩く。

「♪」

朝早いから、通行人もいないので他の者を気にする必要も無い。

やがて見える自身の家の煙突から煙が上がるのを見て、クレイは笑

みを浮かべた。そのまま敷地内に入って、鍵を回し、ドアを開ける。瞬間、薫る香ばしい匂いに思わず鼻を動かした。

そのままドアを閉めて、玄関で靴を脱ぐ。

リビングに入ると、卓上には既に数種類の朝食が用意されていた。椅子の背もたれに水筒の紐をかけると、キッチンに居た少女が彼の方を向いた。

「クレイ。…おかえりなさい。」

「おう、ただいま。」

「お風呂、入るの?」

「いや、シャワーでいいや。お前も2度洗うの面倒だろ。」

「…分かった。」

そう言うと、クレイは濡れた上着を脱いで、リビングを出た。

「ふいー…」

紙を拭きながら、クレイはリビングに戻ると卓上には先程のメニューに加えて目玉焼きが追加されていた。

クレイは椅子を引いて座る。

「…クレイ、卵何かける?」

キッチンから戻ってきたサフィの両手には塩とソースが握られている。

「いつものでいいや。」

「…分かった。」

クレイがそう言うと、サフィは右手に握ったソースを卓上に置いた。

クレイはそれをサツとかけるとフォークで切り取って口に運んだ。少しして、サフィも彼の向かい側に座って食事を始めた。

しばらく静かな時間が続いたが、やがてサフィが口を開いた。

「…クレイ、今日はどれくらいに帰れそう?」

「ん?今日はいつも通りだな。細けエ任務ばかりならすぐ帰れるだろうし。」

「…そっか。」

「は？深夜突入任務？」

ミゼルが渡した書類を見ながらクレイは呻く。

「随分と急だなア。」

「なんでも、諜報部隊の情報が漏れてしまったらしい。警戒されてることに気づいて早く動く可能性が出てきたそうだ。」

「えー、随分と珍しいミスだね諜報部隊。」

「めんどいわねえ。」

「そう言うな。彼らの情報のおかげで助けられたことも何度もあるんだからな。」

「それで、標的は？」

「ここらで大きめのテロ集団だな。武器所有も多いと思うから、全員しつかりと気をつけてくれ。」

「りよーかい。」

「はあ…今日のお店キャンセルしなきゃ。」

「カレンさん最近行き過ぎじゃ…」

「イケメンはいつでもどこでも補充しときたいのよー。」

「……」

「…？隊長、どうかしたか？」

「ン？ああ、いや。何でもねえ。」

少しだけ悩むような仕草をするクレイに、ミゼルはため息をついた。

「……」

ベランダに出たクレイの元に、ミゼルが歩み寄る。

「電話しないのか？」

「誰にだよ。」

「サファイちゃんに。」

「…」

「ま、今思えば始めてだもんな。あの子がお前のところに来てからの深夜任務は。」

「…まあな。」

